

彗星課月報

Monthly Report of the Comet Section, July, 2007

課長 関 勉 T. Seki

幹事 松本敏一 T. Matsumoto 幹事 佐藤裕久 H. Sato

7月の状況 (佐藤)

☆ C/2006 VZ₁₃ (LINEAR) (写真 a, b)

急速に光度を上げて、海外では眼視光度最大 7.0 等という報告があったが、日本では生憎梅雨真っ盛りのためか観測はそれほど多くはなかった。

そんな中、7月14日、宇都宮市の鈴木雅之氏は、国内彗星観測者メーリングリスト(以下 comet-obs ML)で C/2006 VZ₁₃ 画像のうちのいくつかは、核近傍のコマが三角形っぽく見えると指摘した。

7月15日、筆者から OAA 彗星課メーリングリスト(以下 oaa-comet ML)に「鈴木さんが comet-obs ML でコメントしていましたが、C/2006 VZ₁₃ のコマの形状が三角に見えています。私もこの数日三角ないしはシュモクザメの頭部のように見えて近日点を超えてから崩壊するのではないかと興味を持っていました。…台風通過後 C/2006 VZ₁₃ を観測される時は頭部の形状にも注目してみてください。」とコメントした。

8月10日以降この彗星のコマの形状が変わるのか変わらないのか注目される。

7月16日、台風4号が通過後、関課長から oaa-comet ML に「台風一過後の恐ろしいような快晴の星でした。天の川の強い輝きにふと 10 年前のマウナケアの山頂を思い出しました。さて、C/2006 VZ₁₃ を久しぶりにみえました。非常に大きく強く輝いていました。…写真(a)は5分の露出で相当に流れます。固有運動が速いですね。いま 60cm の南北の微動が効きませんのでメトカーフガイドができません。一方同じ夕方の C/2007 E2 は相当暗くなったようです。…」と報告があった。

吉田誠一氏が oaa-comet ML で知らせてくれる毎月の「Interesting rendezvous : 興味深いランデブー」の中に、「* 8 等まで明るくなった C/2006 VZ₁₃ が、たくさん星雲星団と接近します。ハイライトは、13日の NGC 5907 への接近と、22日の M3 への接近でしょう。」とのメッセージがあるように、7月22日の C/2006 VZ₁₃ と M3 の接近があった(写真 b)。筆者は7月23日の夜、月明りの中、西天に観測することができた。C/2006 VZ₁₃ の方は M3 より2周りほど小さく感じられた。

眼視による観測が次のように報告されている。

2007	UT	m1	Dia	DC	Tail	p. a.	Trans.	Seeing	Instru.	Observer	Note
July	15.50	7.6	7'	7	-	-	5/5	3/5	60×20cmR	関 勉	
	23.52	7.6	6.5	4	-	-	3/5	2/5	25×10cmB	佐藤裕久	①
	27.48	7.0	5	4	-	-	3/5	-	40×20cmL	上原貞治	①②

* Note: ①月明り, ②円盤状



(写真 a) C/2006 VZ₁₃ (LINEAR) 2007, 07, 15 (写真 b) C/2006 VZ₁₃ (LINEAR) & M3 2007, 07, 22
 21h 01m~10m (JST) exp. 10m 60cmL TMY400 22h20m (UT) L 8x90s RGB 60s Astrograph 8" + CCD
 芸西天文台 関 勉 © Michael Jäger and Gerald Rhemann

彗星の発見・検出は次のとおり。

☆ C/2007 N1 (McNaught) 7月 10.73 日 UT、R. H. McNaught は、Siding Spring の 0.5-m Uppsala Schmidt 望遠鏡で得た画像から彗星を発見した。NEO Confirmation Page に掲載後、幾人かの CCD 観測者によって観測された。(IAUC 8855, 2007 July 12)

☆ 189P/2007 N2 = 2002 05 (NEAT) 7月 15.23 日 UT、LINEAR (Socorro, NM, 1.0-m f/2.15 反射)、によって P/2002 05 が検出され、F. Fratev と E. Mihaylova (Plana, ブルガリア, 0.25-m f/3.2 反射) そして G. Lombardi と E. Pettarin (Farra d' Isonzo, イタリア, 0.40-m f/4.5 反射)によって観測された。MPC 51823 の予報に対する修正値は Delta(T) = -0.36 day であった。(IAUC 8856, 2007 July 16)

IAUC 8856 上に発表された検出は、付随的な LINEAR の位置観測(その結果、偶然に)だけの結果としての発表であった。他の観測者は、中央局に「NEOCP」Web ページ上で知られていない位置推算表のサブライズポストの結果として「確認の」位置観測を提供した。(IAUC 8858, 2007 July 18)

☆ C/2007 N3 (Lulin) 7月 11.78日 UT、叶泉志(Quanzhi Ye:中山(Sun Yat-sen)大学の学生; LIMIT チームメンバー; 広州、中国)は、林啓生(Chi Sheng Lin:国立中央大学天文研究所; 中歴、台湾)が鹿林巡天(Lulin スカイサーベイ)のコースに 0.41-m f/8.8 Ritchey-Chretien 反射で得た画像から小惑星状天体を発見した。7月 17.4日 UT、J. Young (Table Mountain 天文台, 0.61-m 反射望遠鏡)の観測によって彗星であることが判明した。(IAUC 8857, 2007 July 17)

☆ C/2007 01 (LINEAR) 7月 17.23日 UT、LINEAR サーベイによって小惑星状天体が発見され、NEO Confirmation Page に掲載後、CCD 観測者によって彗星であることが確認された。(IAUC 8858, 2007 July 18)

その後、OAA 計算課長中野主一氏によって、2006年4月2日の LONEOS サーベイと同9日に Catalina スカイサーベイで発見されていた 18 等級の小惑星 2006 GA₃₈ と同定された。(YC 2563, 2007 July 27)

☆ 190P/2007 02 = 1998 U2 (Mueller) 7月 26.09日 UT、L. Buzzi と F. Luppi (Varese, イタリア)が、0.60-m 反射望遠鏡で得た CCD 画像から少し拡散した P/1998 U2 を検出した。P. Birtwhistle (Great Shefford, Berkshire, 英国, 0.40-m 反射)の CCD 画像によって確認された。MPC 51823 予報に対する修正値は $\Delta(T) = +0.3$ day であった。(IAUC 8859, 2007 July 27)

その他比較的明るい彗星は、C/2005 L3 (McNaught)、17P/Holmes などであった。

☆ 2007 年の Edgar Wilson 賞

Smithsonian 天体物理天文台は、アマチュアの新彗星発見者に贈る 2007 年の Edgar Wilson 賞を次の 3 名に配分すると発表した。(IAUC 8854, 2007 July 11)

① John Broughton (Reedy Creek, Qld., オーストラリア) C/2006 OF₂

② David H. Levy (Tucson, AZ, 米国) P/2006 T1

③ Terry Lovejoy (Thornlands, Qld., オーストラリア) C/2007 E2 と C/2007 K5

○1999 年から 2007 年までの受賞した国別受賞数は次のとおり

米国 10、オーストラリア 9、日本 6、クロアチア 3、ブラジル 2、オーストリア 1、ニュージーランド 1、中国 1、カナダ 1、ドイツ 1
○2 回受賞した方々の国と受賞年は次のとおり

Korado Korlevic (クロアチア 1999, 2000)、Roy A. Tucker (米国 1999, 2005)、宇都宮章吾 (日本 2001, 2002)、Charles Wilson Juels (米国 2003, 2006)、Paulo R. Holvorcem (ブラジル 2003, 2006)、John Broughton (オーストラリア 2006, 2007)